

---

# 第8回愛媛形成外科研修会

## 抄 録 集

---

日 時 平成13年12月8日(土)  
場 所 国立病院四国がんセンター  
当番世話人 愛媛県立中央病院形成外科  
小林 一夫

# 研修会プログラム

SECTION 1 1～4 18:00—18:40

座長 石原 博史先生

## 1. 被髪頭部の創に対する簡単なガーゼ固定法

松山市民病院形成外科 ○手塚 敬、向井 知子

頭髪を利用した被髪頭部の創に対するガーゼ固定法を工夫した。固定に使う頭髪の可動性を少なくすることで、ズレ、脱落が起こりにくくなった。剃毛の範囲を最小にでき、固定中、交換時にも疼痛の訴えはない。

## 2. 頭皮骨膜欠損に対して TFLflap と植皮で再建を行った患者の経験

国立病院四国がんセンター 形成外科 ○山田 潔、河村 進

37歳男性。同性愛の患者。5年前に友人（愛人）の暴行を受け、頭皮骨膜の広範欠損を受傷した。free TFL flap と植皮にて再建を行ったが、その後も度重なる暴行を受けいまだ治癒しない潰瘍が存在する。外科的治療のみならず、精神的治療もしくは警察介入の必要性を感じた症例を供覧する。

### 3. 学部学生教育、勧誘の為の形成外科 PR スライドについて

愛媛大学皮膚科（形成外科診療班）同手術部\* ○永松 将吾、森 秀樹  
中岡 啓喜、大塚 壽\*

大学病院である我々の施設は、医師を志す学部学生に対して形成外科という診療科について PR する義務も負っていると考えます。しかしながら、実際には講義時間が少ない、手術見学に恵まれないなどで、形成外科について知識、理解を得る機会が十分でないと思われる。昨年試みに、学生説明用に「PR スライド」を作成、使用した。供覧し、果たして学生を引きつける魅力的な手段となっているか、皆様のご意見を伺いたい。

### 4. シリコンジェルシートによる肥厚性瘢痕、ケロイドの治療経験 症例供覧

十全総合病院 形成外科 原田 伸

熱傷や外傷後に生じる肥厚性瘢痕の治療や予防に当院では積極的にシリコンジェルシートを用いている。有効であった症例を供覧する。シリコンジェルシートは簡便で、痛みを伴わない治療法のひとつで、重大な副作用も無く、他の治療法との併用も可能である。肥厚性瘢痕の治療及び予防に積極的に利用すべき方法と考える。

## 5. 陥入爪 (Stage 3) の保存的治療について

愛媛労災病院形成外科 ○黒住 望、遠所 瑞拡

われわれの陥入爪の保存的療法については第41回日本形成外科学会中国四国支部学術集会で発表した。従来、陥入爪の治療に関して Stage 3 (Heifetz) のものに関しては適応が無いとされていた。今回、この療法を Stage 3 の症例に対して試みたところ、ほとんどの症例で有効であったので報告する。

## 6. 救命し得た高齢者・広範囲熱傷の1例

愛媛県立中央病院 成形外科 ○石原 博史、吉田 和代  
小林 一夫

症例は71才・女性、倉庫内でのガス爆発により体表面積60%の広範囲熱傷を受傷し、当院搬送された。直ちに気管内挿管による呼吸管理と輸液療法を含めた循環管理を行い、第8病日よりデブリードマン・植皮術を開始。第115病日までに計5回の手術施行した。植皮の生着後は早期よりリハビリテーションを行い、第168病日に退院。高齢者熱傷の問題点について考察し報告する。

## 7. リスクマネージメントに関わった1例

愛媛大学皮膚科（形成外科診療班） ○中岡 啓喜、森 秀樹  
永松 将吾

右下顎腫瘍で、下顎骨区域切除後、直ちに遊離血管柄付き腸骨移植による再建を行った。移植床血管として、頸部で動脈2本、静脈1本をクランプし確保した。吻合には動脈1本、静脈1本のみを使用し、未使用動脈は移植組織に隠れ、存在が不明確なまま手術は進行した。その後の対処につき反省を込めて報告する。

**愛媛形成外科研修会総会**

**19：10—19：30**

**司会 小林 一夫**

1. 名称の問題
2. 規約の問題
3. 開催場所・日時
4. その他

## 8. 臀部悪性腫瘍切除後に遊離広背筋皮弁を用いた症例

愛媛県立中央病院 形成外科 ○吉田 和代、石原 博史

小林 一夫

おがた形成外科 緒方 茂寛

臀部に生じた直径16cmに及ぶ扁平上皮癌に対し、化学療法を施行後、遊離広背筋皮弁にて欠損部の再建を行った。

悪性腫瘍に関しては、再発をおこさない十分な切除範囲が必要となるが、再建においても、ある程度に機能的な改善が望まれる。症例においては、臀部という部位のため、腫瘍切除後に十分な組織量が必要となるが、遊離広背筋皮弁を用いることで、良好な結果を得たので、若干の考察を加えて報告する。

## 9. 皮膚悪性腫瘍切除術後の頬部軟部組織欠損に対するアプローチ

国立病院四国がんセンター 形成外科 ○山田 潔、河村 進

64歳女性。4年前より存在する左頬部の皮膚腫瘍に対して生検を行ったところ、Dermatofibrosarcoma Protuberanceの診断であったため、広範囲切除および右鼠径部よりの全層植皮術を行った。術後経過は良好で再発もなく、植皮の状態も問題ないが、頬部軟部組織の欠損を生じた。軟部組織欠損の再建について検討する。

## 10. MFH の 1 難治例

濟生会今治病院 形成外科 ○野澤 竜太  
愛媛大学医学部附属病院 手術部 大塚 壽  
おおたに皮フ科 大谷 一馬

症例は現在92歳の女性。原発巣は左前腕部伸側。平成2年、切除・植皮術、平成6年、上腕部切除術。平成10年、腋窩部の転移に対し2度の放射線治療。現在、左前～側胸部にも浸潤し難治状態。

## SECTION 4 11～13 20:00—20:30

座長 佐伯 典道先生

## 11. Malignant peripheral nerve sheath tumor の一例

松山赤十字病院 形成外科 ○庄野 佳孝  
皮膚科 福原 耕作

Von Recklinghausen 病を合併しない Malignant peripheral nerve sheath tumor の一例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

## 12. 腹痛を主訴とし、診断に苦慮した腹壁デスマイドの1例

愛媛大学皮膚科（形成外科診療班）○戸澤 麻美、永松 将吾  
中岡 啓喜、一色 恵美

症例は12歳女児、腹痛を主訴に当院小児科へ入院した。腹部中央に圧痛を伴う4×3cm大の皮下腫瘤を指摘され、超音波、CT、MRI検査で腹直筋後鞘に接するmasslesionを認めた。当科で摘出したところ、デスマイドとの病理学的診断を得た。

文献的に再発傾向が強いとされるため、拡大切除も考慮したが、年齢、QOLの点から、現在慎重に経過観察中である。経験豊富な先生方のご助言を頂ければ幸いである。

## 13. いかり刺入による下顎骨骨折の1例

わたなべ皮膚科形成外科 渡部 隆博

30歳、男性。真珠養殖のいかだで作業中、停泊させていた作業船のいかりがはね、顔面を直撃し左頬に刺さった。いかりが刺さったまま救急車にて搬送された。同日全麻下にいかりを抜去。X線、CTにて左下顎骨骨折認めたため、後日、観血的整復固定術を施行した。刺入方向、骨折の有無を術前に評価することの難しさ、手術に際して必要な準備などについて考察する。

症例検討会 20：30—21：00

座長 中岡先生